

誤嚥・窒息予防のために私たちにできること ー言語聴覚士対象のアンケート分析からの検討ー

小池 京子[†]第77回国立病院総合医学会
2023年10月21日 於 広島

IRYO Vol. 79 No. 1 (11-14) 2025

要 旨

摂食嚥下障害は多職種による連携が必須の障害であり、評価やリハビリテーションの実施に関しては言語聴覚士が担うことが多い。摂食嚥下機能の評価では、大きく分けて、認知機能、咀嚼や食塊の形成などの口腔機能、食物の誤嚥の有無に関する咽頭機能について検討を行う。その評価に基づいて、姿勢や食物の形態、摂取方法など少しでも安全に経口摂取が継続できる方法の方向性を決定している。経口からの栄養摂取では、基本的には1日3回食事があり、病院や施設においては、看護師や介護士が関わるが多い。摂食嚥下機能の評価によって、誤嚥や窒息の予防にはつながるが、誤嚥・窒息事故をゼロにすることは困難である。令和3年度上半期にNHOで報告された誤嚥・窒息事故の分析と言語聴覚士対象に誤嚥・窒息に関するアンケートの分析を行ったため、考察を加えて述べる。

キーワード 誤嚥・窒息事故, 摂食嚥下障害, 言語聴覚士

令和3年度、国立病院機構（以下NHO）において、誤嚥・窒息事故が増えたことを受け、われわれ、国立病院言語聴覚士協議会（以下ST協議会）は、誤嚥・窒息事故の対策に関する検討の機会を得た。

令和3年度の誤嚥・窒息事故に関する中間報告分の事故分析と傾向、及び対策について検討し、令和5年国立病院総合医学会のシンポジウムで発表した内容について報告する。

件あり、年齢平均は80.2歳、男女比は若干男性が多かった（表1）。

表1 誤嚥・窒息事故の基本項目

項目	結果
件数	28件
年齢平均	80.2歳
男女比	男性 17例 女性 11例
影響度	レベル5 23件 レベル4 5件

令和3年度中間報告の結果と分析

令和3年度の中間報告では、誤嚥・窒息事故は28

医療事故レベルをあらわすインシデントの分類には、レベル0からレベル5までがあり、有害事象は

国立病院機構東京病院 リハビリテーション科 [†]言語聴覚士
著者連絡先：小池京子 国立病院機構東京病院 リハビリテーション科
〒204-8585 東京都清瀬市竹丘3-1-1
e-mail: koike.kyoko.fk@mail.hosp.go.jp
(2024年6月17日受付 2025年2月18日受理)

What We Can do to Prevent Aspiration and Suffocation: Examination from the Analysis of a Questionnaire for Speech-language Pathologists

Kyoko Koike NHO Tokyo National Hospital Department of rehabilitation
(Received Jun. 17, 2024, Accepted Feb. 18, 2025)

Key Words : suffocation aspiration accident, dysphagia, Speech-language Pathologist, Speech-language-Hearing Therapist